

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 10 日現在

機関番号：12501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23710292

研究課題名(和文) 脱社会主義化・市場経済化政策下にあるモンゴル牧畜民の都市化動因と都市適応過程

研究課題名(英文) The Post-Socialist Process of Mongolian Pastoralists and Urbanization in a Market Economy

研究代表者

兒玉 香菜子(児玉香菜子)(KODAMA, Kanako)

千葉大学・文学部・准教授

研究者番号：20465933

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円、(間接経費) 1,020,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は改革開放政策以後の都市化動因と過程を明らかにすることである。中国政府は地方都市を小都市として発展させ、農牧民の人口流出による大中都市の人口増を小都市で吸収させようとしてきた。その都市化をさらに推し進めているのが「砂漠化」と環境政策「生態移民」である。本研究により、都市化動因の背景に1980年代より実施されている土地分配政策があることが明らかになった。都市化を促進する要素には干ばつなど牧畜生産にマイナスダメージを与える気候変化、土地政策、生態移民政策に加え、職業政策、高学歴化、資源開発があげられる。なかでも生態移民は牧畜民の都市化過程において単純賃金労働者化を推し進めるものである。

研究成果の概要(英文)：Due to the family registration system in China, few extremely dense population concentrations appear in Huhhot, the capital of Inner Mongolia, or in Beijing and Shanghai. The main migration destination is the capital of each district. Chinese government has proposed an ecological migration policy to force pastoralists to migrate from rangeland to the center of the district and change their means of subsistence since 2000s. This project focuses on the family dynamics of urbanization and examines both climate and social factors as causes of change using case studies. These dynamics are offered in detail and illustrate the impacts of the distribution of land use rights on family relations and urbanization. Climate change, environmental policy, educational level, employment rates and differences in the residence environment of a city and pastoral areas are demonstrated as natural social factors in this project.

研究分野：若手研究(B)

科研費の分科・細目：地域研究

キーワード：都市化 砂漠化 市場経済化 生態移民 資源開発 中国内モンゴル 環境政策 牧畜民

## 1. 研究開始当初の背景

乾燥地におけるバイオマス量は低く、農耕も困難である。そのうえ乾燥地の環境変動は激しい。こうした乾燥地風土において、定期的な移動による家畜飼養という遊牧形式による資源利用をおこなってきたのがモンゴル牧畜民である。そのようなモンゴル牧畜民世界を、近年「砂漠化」が襲った。これへの対応として、国家政策上、牧畜民に対しては都市化政策がさまざまな形で推進させられてきた。たとえば、「生態移民」などによる都市移住である。こうした自然環境の社会的変化により、モンゴル牧畜民社会は大きな変動を余儀なくされてきた。

激しく進んだ「砂漠化」に対して、牧畜民は家畜の大量売却、飼料の購入や灌漑設備の設置による飼料栽培によって対応してきた。そうしたなかで、砂漠化による家畜の大量死を防ぐために、現金収入の必要性が増し、家畜売却が加速化され、結果的に収入の減少をもたらしたことが牧畜民の都市への移住の促進要因となっていることが明らかになってきた。先述したように、中国の国家政策も、牧畜民の都市化政策を推進してきた。中国政府は、草原砂漠化の原因は牧畜民の家畜飼養にあるとし、「生態移民」、「退牧還草」をはじめとする、草原での牧畜を全面もしくは一部禁止し、牧畜民に都市への移住を強制する政策を実行しはじめたからである。それは牧畜民に、それまでの放牧型の牧畜から、都市に移住し飼料を栽培して家畜を飼育する畜産への転換を迫るものだった。その結果、資金・飼料不足から畜産業に失敗する牧畜民や、化石燃料に依存した定住生活と集約的なモノカルチャー型の農業への転換、都市への進出とそれともなう牧畜民の賃金労働者化、出稼ぎなど、環境政策以前にはほとんど見られなかった現象も多く観察されるようになった。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、脱社会主義化と市場経済化政策下にある、中国内モンゴル牧畜民の都市化動因と都市への適応過程を解明することにある。本研究では、牧畜民都市化の動因としての自然環境災害「砂漠化」と牧畜民都市化の動因としての国家環境政策「生態移民」に着目し、牧畜民の都市経済適応の動態的論理構造と、そこに生ずる諸問題を解明する。

## 3. 研究の方法

本研究では、上記研究目的に掲げた課題にそって、調査研究をおこなった。本研究の主要な方法は資料収集、フィールド調査、オーラルヒストリーの収集である。資料収集に関しては、災害、都市化、移民、中国政策に関する統計・文献資料(日本語、英語、中国語、モンゴル語)を重点的に収集した。フィールド調査は、中国内モンゴル自治区アラシャー地域とオールドス地域の2地域で実施した。アラシャー地域は年間降雨量が150mm以下の極乾燥の砂漠地帯で遊牧をしてきた純牧畜社会である。2001年から生態移民政策が実施されている。オールドス地域は砂丘地帯であるが比較的湿潤な、農耕も取り入れた農牧社会である。早くから定住化が進み、農牧複合をおこなってきた。2010年冬より生態移民政策が施行されている。

## 4. 研究成果

### (1) 都市化動因：自然環境災害「砂漠化」

アラシャー地域の「砂漠化」とは河川水量の減少と干ばつである。これら自然環境災害に対して、かつては移動、現在は飼料の購入、家畜の売却、乾燥に強いヤギへの特化という対応をおこなってきた。ヤギのカシミア毛による収入によって、生態移民政策施行前は内モンゴル一豊かな地域の一つとされた。都市化は顕著ではなく、都市に進出する牧畜民のほとんどが国家公務員、教師など正規有職者であった。

オルドス地域の「砂漠化」とは干ばつで、灌漑による飼料栽培の拡大、家畜の売却処分、販売を目的としたブタの肥育・繁殖で対応してきた。その過程で、現金収入の必要性が増し、借金にあえぐ牧畜民も少なくなき、若者の都市進出も著しく進んだ。そのため、牧畜民の都市移住も早くから進み、正規就業者だけでなく、小都市における酪農による乳製品の販売、小売業などさまざまな業種への進出が見られた。進出先も地域の小都市だけでなく、オルドス市、他省、モンゴル国など多岐にわたっていた。

## (2) 都市化動因：国家環境政策「生態移民」

アラシャー地域の都市化動因は 2001 年に始まった生態移民政策で、その後、牧畜民の都市化が急激に進んだ。移住を促進するために、生活補償金の支給、住居の優遇支給、購入援助が実施されてきた。移住後の経済活動として推奨された家畜の畜舎飼育が失敗したため、河川水を利用した換金作物の栽培が拡大した。そうしたなかで、移住前の牧地に農地をもつ牧畜民は農地を貸し出すという地主化現象がおきている。他方で、農地をもたないゴビ地域出身の移住者は賃金労働者になることを余儀なくされ、牧畜社会の階層化が顕在化している。こうしたなかで、生活保障金をめぐる抗議デモがおきるなど社会の不安定化につながっている。

オルドス地域では、2002 年より退牧還草政策が実施され、5 月と 6 月の放牧が禁止された。そのため、放牧制限を受けない、つまり環境政策の対象外であるブタの肥育と繁殖がさらに拡大した。その結果、飼料の需要が高まり、農作業の機械化も進み、農地がさらに拡大した。同時に、2000 年代後半から、天然ガス開発が急速に進み、土地収用にかかる補償金が大きな収入源となっている。ただし、補償金の対象になるのは資源開発対象地のみであり、収用対象になるかどうかという偶

発的な現象の下、牧畜民の貧富の差が拡大している。また、資源開発にかかる道路などのインフラ設備が整い、地域全体の都市化が進んでいる。相前後して、2010 年冬より都市へ移住させる生態移民政策が施行された。ただし、移住は牧畜民の自主選択になっており、拒否も可能である。移住促進のため、都市移住者へのマンションが無償提供されるが、その代償として牧畜と農業が一切禁止となる。現在、資源開発による環境破壊をめぐって抗議によるモンゴル牧畜民の死亡事件が少なくとも 2 件おきている。生態移民政策は環境破壊の原因を牧畜民にきせ、開発対象地である牧地から現地住民を締め出す都合の良い土地収用政策であるといえる。生態移民の施行状況をみると、調査対象地域では、住民のおよそ 3 割が移住を選択した。実際にその経過を丁寧におってみると、完全に都市へ移住した家族はほぼ皆無で、草原にとどまる家族、政策対象外の牧地を賃貸して牧畜を続ける世帯、家族の一部のみの都市への移住など、都市移住および適応形態は多様であることが明らかになった。

## (3) 牧畜民の都市進出の動態的論理構造と、そこに生ずる諸問題

都市への移住は個人の自発的な意思によるものだけではない。とりわけ中国においては、人びとの移住にも国家政策が大きく影響してきた。中国では戸籍制度によって、自分の出身地以外での就職または居住が厳しく制限され、実質的な移動はほとんど不可能であった。そうしたなかで、理想的な都市移住とは自治体職員、教師など公務員になり、都市に居住することである。もちろん、公務員になることは決して容易ではない。他方で、中国政府は地方都市の鎮を小都市として発展させ、農牧民の人口流出による大中都市の人口増を小都市で吸収させようとしてきた。この結果、首都北京市や内モンゴル自治区首

府フフホト市などに人口が極度に集中するという現象は起きていない。

1980年代の土地分配から現在まで、牧畜民とその子女の小都市進出が顕著であるが、その要因には「砂漠化」、環境政策以外に土地分配、高学歴化、公務員試験の整備がある。土地の分配に関して、モンゴルは一般に父系の末子相続である。後継者以外は結婚を機に婚資として家畜をもらい独立する。このあり方を大きく変容させたのが土地分配である。というのは、土地の分配以降、新たに独立した世帯が利用できる土地がないため、基本的に親と同居する以外には、牧畜を継承することができなくなったからである。跡継ぎ以外のきょうだいは望むと望まないにかかわらず、牧地のある家に婚出するか都市で暮らすしかなくなったのである。土地分配をめぐるにはそれともなう定住化による環境への負荷の増加や社会経済的な影響、文化的な影響が主に論じてられてきたが、土地の分配は家族関係の変容、都市化要因として大きく作用するものであることが明らかになった。

同時に、牧畜地域への回帰現象も起きている。降水量の増加による牧畜の安定、インフラ整備の改善による「草原の郊外化」、居住環境としての草原に対する評価の高まりが背景としてある。

本研究から牧畜継承と都市化を促進する要素を一般化すると、牧畜継承を促進する要素には、自然環境条件として、牧地を豊かにする降雨量の増加といった気候変化があげられる。人文環境として、生活環境の改善、つまり草原の郊外化による都市との経済的社会的格差の縮小が重要である。牧畜生産の向上、労働の軽減に加え、牧畜そのもののイメージの向上も牧畜継承には重要である。他方で、都市化を促進する要素には干ばつなど牧畜生産にマイナスダメージを与える気候変化、土地政策、生態移民政策、職業政策、高学歴化、開発による環境破壊があげられる。

都市適応においては、公務員と単純賃金労働者という職業の差が大きい。なかでも、生態移民政策は都市移住によって牧畜民を単純賃金労働者にかえるものである。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計10件)

児玉 香菜子、定住モンゴル牧畜民の都市化動態、第28回北方民族文化シンポジウム網走報告 環境変化と先住民の生業文化—家畜飼育・牧畜における適応—、2014、23-28

KODAMA, Kanako and Konagaya, Yuki, Oirat oral histories of natural and social changes in Ejene Banner, Inner Mongolia, Konagawa, I.L.a.Y. (eds), Senri Ethnological Studies Oirat People: Cultural Uniformity and Diversification, 2014, 259-275.

児玉 香菜子、モンゴル牧畜民の農耕実践—ウーシン旗の事例から—、昭和女子大紀要：中国の経済発展と少数民族の文化的変容、19、2013、27-35

KODAMA, Kanako, Sedentarized Mongolian Pastoralists' Strategy to combat Desertification, アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明研究, 2012, 1:129-145

児玉 香菜子、変わりゆく内モンゴル、オールドスの社会と文化、善隣、2012、417、12-19

[学会発表](計4件)

KODAMA, Kanako, The Transformation from a Pastoral Society to an Agricultural One in Inner Mongolia Mongolia Under Chinese Reform and Opening Policies, IUAES, May 15, 2014

児玉 香菜子、「過放牧」論の解体：中国内モンゴル定住牧畜民の干ばつ対策から、日本文化人類学学会第47回研究大会、慶應義塾大学、2013年6月8日

児玉 香菜子、環境政策からみた中国の牧

畜理解、日本文化人類学学会第 46 回研究  
大会、広島大学、2012 年 6 月 24 日

〔図書〕(計 7 件)

児玉 香菜子・サランゲレル・アラタンツ  
ェツェグ、極乾内モンゴル・ゴビ砂漠、黒  
河オアシスに生きる男たち 23 人の人生、  
アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明叢書 10、  
2014、名古屋大学文学研究科比較人文学研  
究室

児玉 香菜子、定住モンゴル牧畜民の現在  
過放牧論の解体、藤田昇他編、モンゴル  
草原生態系ネットワークの崩壊と再生、京  
都大学学術出版会、2013、353-393

児玉 香菜子、「脱社会主義政策」と「砂  
漠化」状況における中国内モンゴル牧畜民  
の現代的変容、アフロ・ユーラシア内陸乾  
燥地文明叢書 1、2012、名古屋大学文学研  
究科比較人文学研究室

児玉 香菜子、環境保全のための移住政策  
「生態移民」、胡樹主編、東北亜多元文  
化共生状況及発展研究、内蒙古大学出版社、  
2012、582-590

Konagaya Yuki, Sarengerile, and Kanako  
Kodama (eds), An oral history of mothers in  
the Ejene Oasis, Inner Mongolia, 2011、  
Shoukadoh

児玉 香菜子・小長谷有紀、理想と現実の  
狭間で—植林ボランティアからスタディ  
ツアーを目指して、吉川賢・山中典和・吉  
崎真司・三木直子編、風に追われ水が蝕む  
中国の大地—緑の再生に向けた取り組み  
—、2011、学報社、169-177

〔その他〕

国際研究集会(計 15 件)

児玉 香菜子、モンゴル牧畜民の都市化過  
程 中国内モンゴル自治区ウーシン旗の  
事例から、第 28 回北方民族文化シンポジ  
ウム 環境変化と先住民の生業文化 - 家  
畜飼育・牧畜における適応 -、北海道立北

方民族博物館 2013 年 10 月 5 日

児玉 香菜子、Mine development and  
ecological migration: a case study of A district,  
Ordos City, Inner Mongolia、第 6 回ウランバ  
ートル日モ国際シンポジウム「モンゴルに  
おける鉱山開発の歴史、現状と課題、モン  
ゴル国モンゴル・日本人材開発センター  
2013 年 9 月 6 日、

児玉 香菜子、内蒙古牧民城镇化因素及背  
景、首届蒙古文化与环境座谈会、中国内モ  
ンゴル師範大学 2013 年 8 月 31 日

KODAMA, Kanako, Adapting to Drought  
and the Market Economy of the  
Sedentarized Mongolian Pastoralists, 1<sup>st</sup>  
Global Conference on Environmental Studies,  
Antalya, Turkey, 24 April 2013

KODAMA, Kanako, The measures of  
Mongolian nomads for natural disaster:  
Comparison with settled pastoralists, Oxford  
Interdisciplinary Desert Conference, Oxford  
University, England, 30 March 2012

Kanako, Kodoma, Environmental,  
Economic, and Cultural Sustainability  
and China's Ecological Migration Policy:  
Changing Society and Culture in Ejene  
District, Inner Mongolia, Bloomington,  
IN Univeristy, November 29, 2011, 招待  
講演

児玉 香菜子、生態移民政策による都市化  
とその現状 内モンゴル・額濟納旗の事例  
から、国際シンポジウム：東北アジア  
における多文化共生の実態研究とその可  
能性—他者的視野とネットワーク構築—、  
中国内モンゴル自治区シリントル盟 2011  
年 8 月 3 日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

児玉 香菜子 (KODAMA, Kanako)  
千葉大学・文学部・准教授  
研究者番号： 20465933